

# 保育の体験と思索

——子どもの世界の探究——(二十二)

津 守 真

## 幼稚園にいきたくない

四月から一年の間には、幼稚園にいきたくない子どもに出会うことは、ごく当り前のことである。いきたくない子どもを、毎朝、ひきずるようにしてつれていったり、遠まわりをして面白いものを見ながら幼稚園につれていったことが、私自身、何度あるか数えきれない。また、この一年間にも、幼稚園にいきながらいない子どもの相談に、何回か当面した。幼稚園が子どもにとって、自分らしく生活できる場所になっていけば、幼稚園にいきたくない子

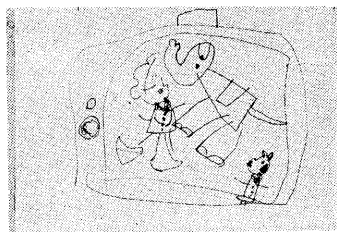
どもはずっと減るだろう。しかし、また、どんなによく遊べる幼稚園でも、子どもの生活の中には、おとなに気付きにくいちょっとしたできごとは絶えないし、幼稚園にいきたくない気持を起させる日があつて不思議はない。一年の間には、雨の日もあれば、晴れる日もあるのと同様である。

子どもによっては、何週間も、何か月にもわたつて、幼稚園にいきたくない日がつづくことがある。それは、それぞれの場合に、応じて考えてゆく問題であつて、それを解決する公式のようなものはない。四歳児の項を終るにあたり、以前にこのシリーズで記したことのあるYについて考えてみたいと思う。

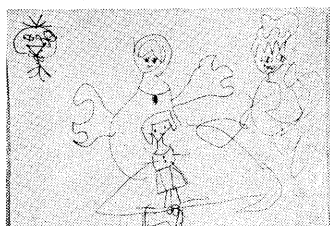
○

Yは入園式の前日まで、幼稚園を楽しみにして待っていた。入園式の前の晩、ねるとき、ベッドにねかせにいった私の顔を見て、Yはにこにこして言った。「うれしいなー、うれしいなー、あしたはMちゃんと幼稚園に行くんだ。お友だちが、五十人も百人もできた」 入園式の翌日から、幼稚園に行くYの足は重くなった。(それについては、このシリーズの(九)に記した。) 幼稚

◀写真1



◀写真2



園では、部屋の戸口のところで、じっと立って見ているだけの目がつづく。家に帰ってからは、兄や姉や、その友だちとよく遊ぶ。幼稚園では遊ばないと自分できめていたようである。こうして一か月たった五月十一日に、家でかいた描画に次のようなものがある。(写真1)

トランクのようないれ物の中に、人と動物が向き合っているところが描かれる。右端に小さく女の子が描かれている。トランクには鍵穴がついている。

全体が内部のイメージである。おそろしい動物と向い合っている女の子も自分であり、右下で小さくなって見ているのも自分であると考えられる。幼稚園で、じっと立って見ている子どもの内的世界には、何か得体の知れない生きものが存在し、それと向い合っている自分自身があるのであろう。

同じ日に描かれた描画(写真2)では、女の子は大きな人物の内側に描かれる。明らかに、母親に抱かれている自分自身の姿である。同じ画面に、もうひとつの人物が描かれるが、その目や口は恐ろしく描かれ、手足は不明確で、得体の知れない恐ろしい存在である。女の子を抱く母親の手が、大きく明瞭にかかっているのと対照的である。幼稚園で出会うおとなたちは、Yにとって、

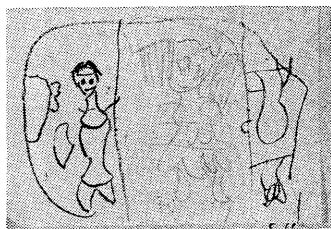
得体の知れない恐ろしい存在として映っているのかもしれない。

それから一週間後の五月十一日には、次の描画が描かれる。

(写真3)

かこみの中が三つの空間に分れている。左端の空間には、人が描かれる。Yは「これ ちらかったおへやで おかあさんがおしごとしているの おもらしたの」と言う。中央の空間の人物については、「女の子がパジャマきて ねむっているの」と言う。

女の子は、パジャマを着て眠っている。パジャマは、外に出て



▲写真3

ゆくときの衣服ではない。家の内で、最も内側で、眠るとき衣服である。その衣服は、二本の横線によって縛られている。女の子は、外の世界に出てゆく希望を放棄して、自分自身の内側の世界に入りこむよりほかないと感じているかのようである。

起きて動いていると認識されているのはお母さんであるが、お母さんはちらかった部屋にいる。ちらかった部屋というのは、子ども自身の、困惑した感情を示すものであろう。また、お母さんはおもらしをしている。母親は、普通、おもらしをするものではない。これは、母親によって代表される女性のおとなに対する認識の混乱を示すものではないかと思う。幼稚園で、母親以外のおとなに出会い、母親とは違った反応に遭遇して、子どもの側におとなの女性に関する認識の混乱を生じたのではないだろうか。

右端の空間には、何かよく分らないが、物が描かれている。その空間の仕切りには、ドアの把手がつけられている。女の子の眠っている空間のさらに奥には、何かがしまっている空間がある。

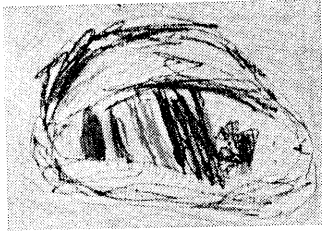
これらのえを描いたころも、家に帰れば、兄弟や母親と遊び、いろいろなことをして遊んでいる。その動いているところだけを見たら、この子どもの内側に、このえに示されるような世界があるのを見とれることは困難かもしれない。子どもが、自分からか

きはじめ、自分で満足のいくように描くえには、そのころに、子ども自身が生きている生活の基調をなすイメージがあらわれる。

この子どもは、幼稚園について、自分がどう対処してよいか分らない、おそろしく、得体の知れない存在に出会っている。そして、その心は外に向くのではなく、内に向いている。

Yは、一学期は、ともかくも幼稚園にいった。

夏休みに入ったばかりの七月二〇日、台所で小さな便所虫を見つけた。姉たちとそれをいじっているうちに動かなくなってしまう。それを小さな籠にいれて、Yはだいじにしていた。翌朝、

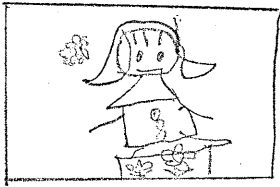


▲写真4

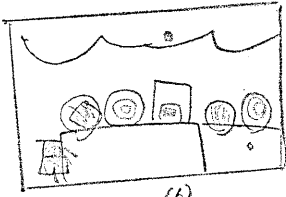
朝食後、その籠をもってきたが、虫はもうひっくりかえって死んでいた。それをもって、母親をいやがらせたりしていたが、私がハッパをとってきたら、と言うと、ハッパをとってきて、いれてやった。やがて、画用紙を持ってきて、「むし かく」と言っていて、かきはじめた。虫のからだをいろいろの色でぬり、ハッパをかき、赤いリボンをつけた。虫は、いく重にも、色でかこまれた中に描かれる(写真4)。いく重にも囲まれた内部の、温かく、安定したイメージがあらわれている。ひとつの虫を見つけても、それは、子どもの内部のイメージによってとらえられる。

夏休みの間に、何枚も、温い内部のイメージを基調として、内と外のテーマのえが描かれる。その多くのが、描画は簡単な図式的線がきで、ことばが主になっている。次のものは、八枚つづきのえで、次のようなことばがついている。(図1)

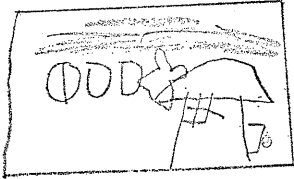
- (1) 表紙
- (2) あるとき おうちがありました。そこには おはながさいていました。
- (3) そこには おうちがありました。おんなのこが そこには すんでいたのです。
- (4) そこには 一けんのおうちがありました。きょうはゆきなので ゆきだるまをつくりました。



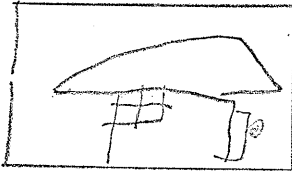
(5)



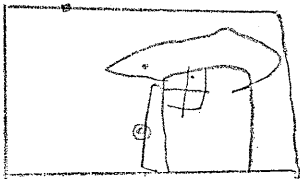
(6)



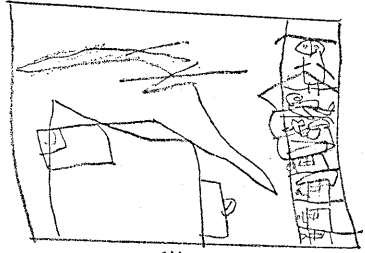
(7)



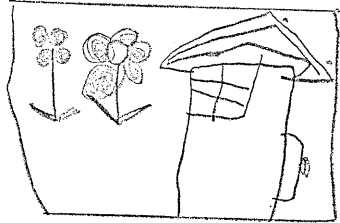
(8)



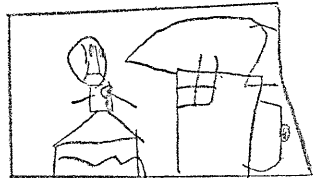
(9)



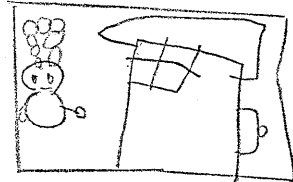
(10)



(11)



(12)



(13)

(5) ここには かわいいおんなのこがいました。おそとにあそびにいったのです。

(6) きょうは おんなのこのパーティです。だって おんなのこのおたんじょうびだから パーティです。

(7) よるになりました。こどもはかえってきました。みかんづきさまができました。

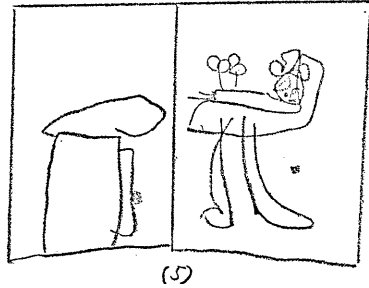
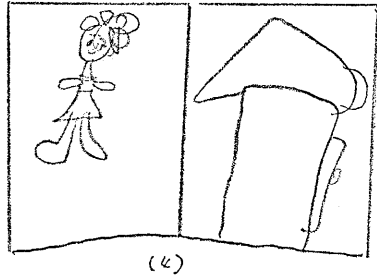
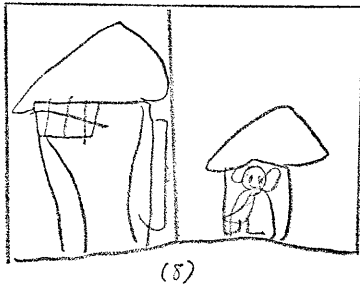
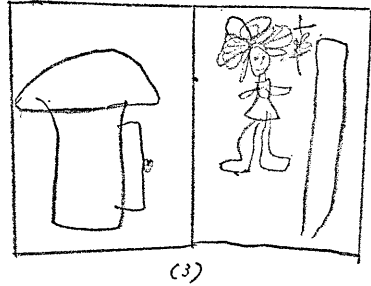
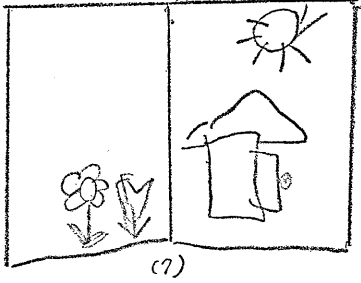
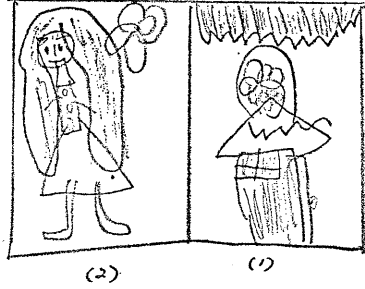
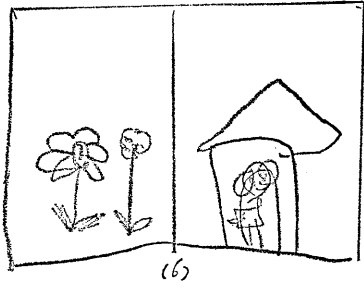
(8) あさになりました。こどもが ようちえんにいきました。  
(9) うちのえ

この一連の絵は、うちの絵からはじまり、うちの絵がくり返しあらわれる。どのうちにもドアがついている。それは女の子の住むうちで、女の子は自分である。外には花が咲いており、また、雪だるまをつくる。家の中では女の子のパーティで、ご馳走が並んでいる。家の中はパーティで賑やかであり、外も、はなやかである。夏休みになって、幼稚園から一步はなれたとき、幼稚園と家と両方が思い出される。夜になって、三日月の出るころには、子どもは家にいる。朝になると幼稚園にゆく。家と幼稚園との間を往復する生活が子どもの心に思い出され、子どもの心もまた、その両者の間を揺れ動いているのだろう。その絵をかいているのは、幼稚園に行く必要のない夏休みのことであるが、その間も、子どもの心はその両方の間を往復して、考えをめぐらしていると

言つてよいのではないかと思う。

夏休み中に描かれた絵のシリーズのもうひとつは、次のようなことばを伴つたものである。(図2)

- (1) 表紙 うちのえ
  - (2) おんなのこが そとであそんでいました。
  - (3) うぐいすひめがあそんでいました。
  - (4) このこは だれもあそんでくれません。
  - (5) このこは びょうきなので びょういんであそんでいませす。
  - (6) いぬが おはなをみています。
  - (7) このこは ちゅうちいぬがいますが、こわくありません。
  - (8) ここに ちゅうちいぬがいますが、こわくありません。
- これも、内と外のテーマの絵である。女の子とうぐいすひめは、同じスタイルのリボンを頭につけており、同じ人物として描かれている。女の子は、うぐいすひめという素敵な華やかさを持っている。その女の子は家の外にゆく。幼稚園かもしれない。けれども、外ではだれも遊んでくれない。自分自身をおひめさまに



して描いたこの子どもは、次には、自分自身を病気にする。病気でねているベッドは家の外に描かれている。家の外にいる自分は、元気にとびまわる自分ではない。まだ自分自身を十分に發揮している状態ではない。Yは犬がこわい。道路で犬を見ると、犬を避けて遠くをまわって歩いてゆく。ここでは、犬がお花を見ている。その犬は大小屋の中に描かれており、外で自由に歩きまわっている犬ではない。花といっしょにあるので、安全だとは思いますがやはりこわい。この子のうちはまだ目覚めていない。内側にはいりこんでいるこの子の心は、まだ外に出てゆく準備が十分にできていない。そして外を見ると、犬がいる。こわくないと頭では否定するけれども、やはり、ちょっとこわい。「ちょっと」とこつとばを付け加えるところに、Yの内と外に動揺する心があらわれているように思う。

夏休みの間に、似たような絵がほかにも描かれるが、気持ちの上で、内と外との間を動揺しながら、秋の学期を迎える。

十月、十一月には、幼稚園にいきたくない日が多くなる。子どもの心は、幼稚園と家との間を揺れ動きながら、現実には、幼稚園のマイナスの面が強く認識されるのだろう。朝、どうしても幼稚園にいかないと言って、部屋の奥に逃げこむ日もある。ひきす

るようにして、つれてゆく状態である。幼稚園にいつてしまうと、普通の生活をしているようである。喘息のため、せきが出て、苦しくて、休む日も多くなる。

11月17日

Yは、家に帰ってきて、ふとしたときに言う。「幼稚園でつまんないのよ。うるさくて、わーわーして」

Yには、幼稚園は、うるさくて、わーわーするところと感じられていることがわかる。大勢の子どもがいても、その子どもたちのしていることの意味がとらえられていけば、うるさい騒音とは感じられないであろう。一緒になって遊び、自分もその中に入りこんでいけば、外部の人には騒音と聞えても、子ども自身には、それぞれの動きや声は、ある種の秩序を持つてであろう。逆に、整列し、並んで坐っていても、子どもたち自身が、心から参加していなければ、先生の声も、子どもの動きも、秩序のない騒音となるであろう。

12月13日

Yは熱を出した。「ねつで とくした。ようちえんにかかないですんで」と何度も言う。

熱を出して寝ていると、兄や姉たちが、お見舞いを言って、カードを作ったり、絵をかいたりして持ってきてくれる。一日中、

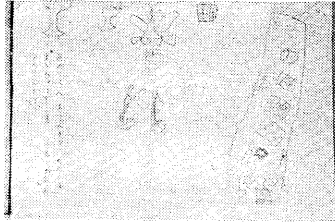


にここして床の中で遊んでいる。

12月19日

病気の日の朝、気持ちがよくなって、「バラバラおちる、……」と歌をうたいながら、絵をかく(写真5)「スケートぐつはいたおひめさま。びょうきになったあさでね、クリスマスツリー、まどからリスがのぞいてる」と言う。

右端の木は、全体がクリスマスツリーであり、家になっている。家の中にはりすがいて、窓から外をのぞいている。家の外には、うさぎのおひめさまが、スケートぐつをはいて踊っている。



▲写真5

雪が空から降っている。家の中から外をのぞいていた自分が、戸外に出て踊っている絵である。おひめさまを描く線は、軽い曲線で、雪も軽いタッチで描かれている。病気が治りかけたときの快い気分と共に、軽い足どりで外に出てゆく心の動きがよくあらわれている。

三学期になると、幼稚園にいきたくないと言ってぐずる日が少なくなる。そして、四歳児の三学期から、五歳児の一学期にかけて、Yは、ようやく、幼稚園で大声を出して動き、友だちとよく遊ぶようになってくる。描画の面からいうと、内部のイメージをテーマとする描画が、より精細になってくる。そして、その後、本格的に外出のテーマの描画があらわれるのは、五歳児の後半である。

Yが幼稚園にいきたくなかったとき、Yの心には、自分自身の内部のイメージに浸りたい気持ちが優勢であったと思う。温い家の中で、静かに落着いて、ひとり、何かを作ったり、ごたごたと物を動かして遊んだりして過すことの方が、大勢の子どもの現実の生活の中に出てゆくよりもずっと好ましかったのだと思う。これは心理学的退行ではない。むしろ、人間の心の自然の

動きである。幼児期には、このことはとくに重要で、このような生活が幼児期にはまだ分化していない芸術や科学やさまざまなことの母胎となっているのであると思う。そして、時がくれば、子どもの心は外に向って動き出す。そのときには、他の子どもと一緒に交わって遊ぶことが面白くてたまらなくなるであろう。Yについていうならば、この後、決然として外に向って足を踏み出す時期がある。それは、内部のイメージそのものの中から生み出される外出のイメージによるものであって、外部からの促進によるものではないと思う。この時期のことについては、後に詳述する機会があると思う。

子どもがひとりで自分の世界に浸りたいとき、それは家庭の中でのみ満たされるとは限らない。幼稚園の中で、子どもが安心してひとりになっていられる空間と時間があるならば、子どもはそれたのしみにして幼稚園にいくかもしれない。幼稚園は常に、こういう時期の子どもが何割かいることを前提にして考えられねばならないと思う。そして、子どもの心のエネルギーが外に向ったとき、幼稚園では、いつでも、それを受けとめてくれる外の世界がある。この両方の生活を可能にする幼稚園だったら、幼稚園に

いきたくない子どもは、ずっと減るにちがいない。

親の側から、このことを考えると、子どもが幼稚園にいきたくないときにも、幼稚園につれてゆかねばならないと考えすぎたと反省している。ひきずるようにして無理につれてゆくことはなかったと思う。何日間か外の世界の生活をしたら、一日か二日、ゆっくりと、子どもなりにそのことを考える時間が必要にもなるだろう。熱を出さないでも休む日があつてあたりまえであろう。子どもによつては、休む日が多くて、ときどき幼稚園にゆくような時期があつても、幼稚園は、それで十分に意義をもっている。そのような子どもが、後になって登校拒否になるのかといえ、決してそうではない。むしろその逆であると思う。どの子どもにも、子どもの生活のリズムに合わせて、幼稚園を考えてゆくゆとりが、こちらにもほしかったと思う。

(つづく)